

大聖寺保管の板碑紹介

加藤 幸一

1. 板碑とは

板石塔婆とか、青石塔婆とも言われる板碑は右図のような石でできた供養塔である。自分の死後の冥福を祈る逆修供養、あるいは死者の冥福を祈る追善供養のために建てたものである。板碑は中世に始まって中世に終わるといわれるように、鎌倉時代中頃から室町時代後半にかけて造立し、わずかであるが近世にはいって安土桃山時代の慶長年間までみられる。江戸時代以降の造立は全くとだえてしまう。

板碑の特色は次の四つがあげられる。

- ①頂部は三角形（頂部山形）になっている。
- ②頂部の下に二本の切り込み線（二条線）がはいつている。
- ③一個の石材で作られている。県内では秩父で採れる緑泥片岩（秩父青石）を使用している。
- ④一面のみに刻まれている。裏には何も刻まれていない。

右上の図を説明すると次の通りである。

主尊・・・拝む対象としての仏様。上図では阿弥陀仏を表す梵字キリークである。わずかであるが梵字でなく図像で描かれている場合もある。

蓮華台・・・仏様を安置するための蓮の花でできた台。

偈文・・・経典からとった一節。仏を讀えたり、仏法の真髓を述べたりしている。この図の場合は観無量寿經という経典からとった四句からなる詩文である。偈文のことをただ単に「偈」とも言う。



願文^{がんもん}・・・願いごとの文、つまり造立の趣旨を表した文である。

この図の場合は、「右志者^{みぎこころざしほ} 慈父^{じふ}幽儀^{ゆうぎ}成仏也^{じようぶつなり} 孝子^{こうし}敬白^{けいはく}」と刻まれていて、子が父の追善供養のために造立したことがわかる。

紀年銘^{きねんめい}・・・刻まれた年月日をさす。板碑を造立し、供養した年月日を表す。この図の場合は、「正嘉元年^{しょうか}丁巳^{ひのとみ}十二月^{みそか}晦日^{みそか}」と刻まれている。

2. 板碑の本場、埼玉県

最古の板碑が、荒川流域近くの埼玉県江南村の大沼公園弁天島^{べんてんじま}で発見されるなど、ごく初期の板碑が埼玉県大里郡^{おおさとぐん}、北埼玉郡、北足立郡の荒川に近い地域に分布していることから、板碑の発祥地は荒川中流域と考えられている。その板碑の石材として、荒川上流の秩父地方で採れる、板状にはがれやすい性質をもつ緑泥片岩が利用された。これらの板碑を武蔵型板碑といい、埼玉県内を流れていた当時の荒川流域を中心に、埼玉県の他に東京都全域、群馬・栃木・茨城の各県の南部、千葉県の西部、神奈川県^{あだち}の東部などに分布している。これらは全国でも最も形態が整っていて、数量も最も多くみられる。つまり、武蔵型板碑は質量とも全国一を誇っているのである。特に埼玉県は板碑の本場である。埼玉県教育委員会が昭和51年（1976）10月から昭和56年3月までの5カ年間の月日にかけての板石塔婆緊急調査によると、昭和55年9月30日現在で、20,201基を確認している。

3. 越谷市の板碑

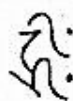
板碑は川を利用して各地に運ばれたと考えられている。越谷市内を貫通している元荒川^{もとあらかわ}は当時の荒川主流であったため、市内各地に板碑が豊富にみられる。昭和44年発行の「越谷市金石資料集」によると、96基及び破片40数個が確認されたという。その後もかなり発見されよう。再調査が必要である。

4. 大聖寺保管の板碑

現在、大聖寺（大相模不動院）では、11基保管され、1基が所在不明である。11基のうち3基は越谷市の板碑調査後にわかったものである。

No.1 文和三年(1354)弥陀一尊種子板碑

蓮華台上に載った主尊の種子キリークは荘嚴體で刻まれている。蓮華台の上部には花心を描いた跡が一部残っている。紀年銘の「文和」は関東に一般にみられる北朝の年号である。なお、南朝では正平九年にあたる。この板碑の表面はかなりすり減っていて、銘文の半読が困難である。中央には文和三年三月に延修供養（生前に自分の死後の冥福を祈る）した人の法名（仏門に入った人や死者に授ける名前）が刻まれていたと思われる。この板碑は西方番場の青藤正雄氏の所有である。



三月□回

文和三年



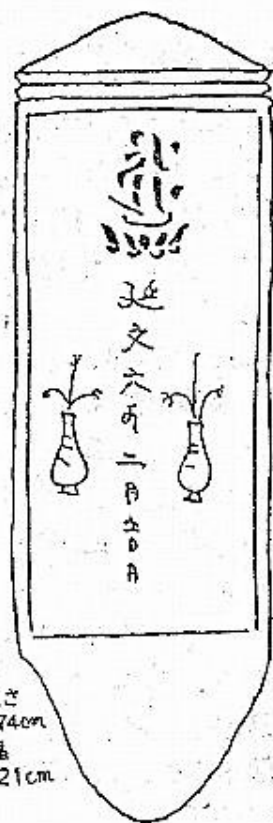
No.2 延文六年(1361)弥陀二尊種子板碑

この板碑は現在所在不明である。「越谷市金石資料集」三十ページに記載されている図版によると、荘嚴體で刻まれた主尊キリークと、それを載せた蓮華台が描かれている。蓮華台上部には花心がみられる。紀年銘の「延文」は北朝の年号である。紀年銘の両脇に一對の華瓶（仏前に花を供える時に使う入れ物。普通、金銅製の胴張りの壺で模様のないものが多い）がみられる。それぞれ三本の茎が描かれている。このように双式の華瓶の場合は三茎が一般的である。また、華瓶がともに徳利形に描かれているが、これは初期のものによくみられる。なお、花も初期のものは、きちんと蓮の花を描くものがある。のち、花や華瓶がかなり簡略に描かれるようになる。塔身部には回りに郭線がみられる。



延文六年二月吉日

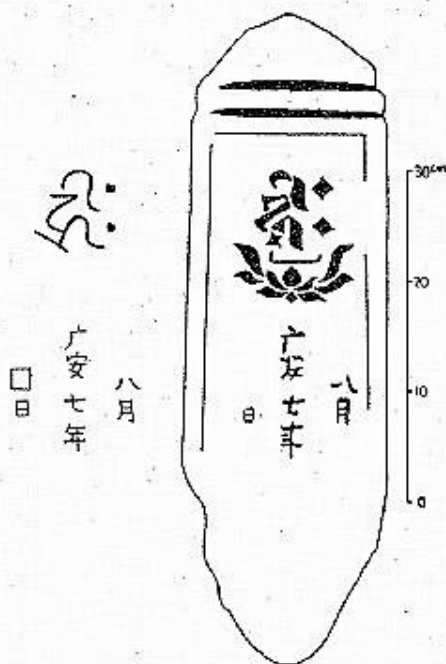
高さ
74cm
幅
21cm



※この図版は越谷市金石資料集三十ページに掲載しているもの。

No.3 応安七年(1374)弥陀一尊種子板碑

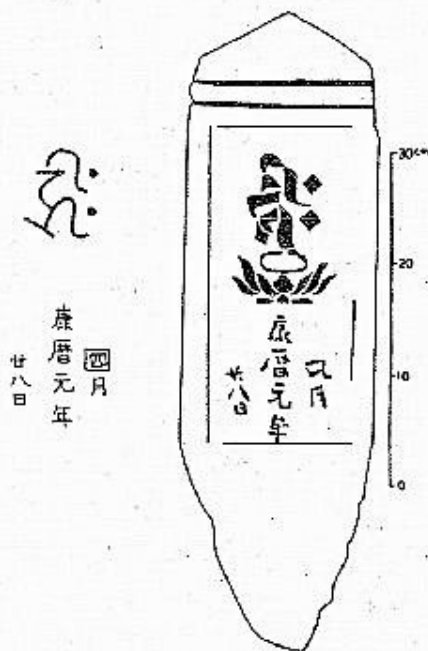
主尊・蓮華台ともV字形に深く彫る葉研彫で刻まれている。主尊キリークは荘嚴体で書かれている。荘嚴体は比較的初期に多くみられる。蓮華台の上部には花心が描かれているのがわかる。蓮華台の下の「応安」は北朝の年号である。その向かって右側には「八月」が刻まれているが、左側は日にちが刻まれていると思われる。塔身部には回りに郭線がみられる。この板碑は西方番場の齊藤正雄氏の所有である。



No.4 康暦元年(1379)弥陀一尊種子板碑

蓮華台に載った主尊のキリークは荘嚴体で刻まれている。蓮華台の上部には花心が描かれている。紀年銘の「康暦」は北朝の年号である。塔身部には回りに郭線がみられる。

No.1, No.3, No.4 の三基の板碑は、西方の番場の齊藤材木店主齊藤正雄氏(相模町六丁目五六四の一)所有のもので、昭和六十二年二月頃に大聖寺に保管される。これら三基の板碑の発見のいきさつは、大聖寺所有だった杉のはえていた護摩木山と称する地(相模町六丁目四九四あたり、もと金剛寺の山林か?)を昭和三十五・六年頃に関懇した時に出土したものである。現在の護摩木山の地は宅地となっていてその名残りは全くない。



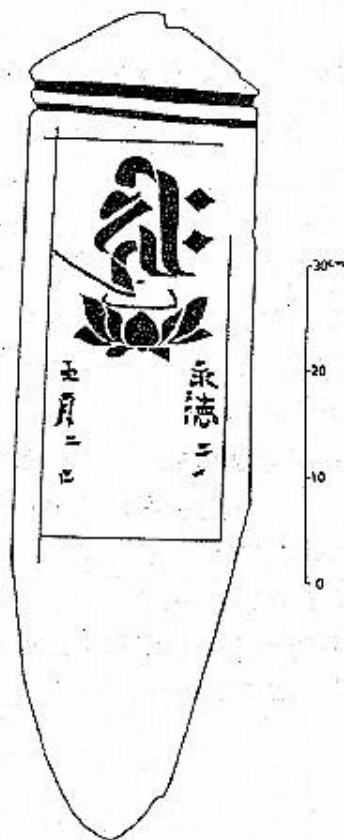
No.5 永徳二年(1382)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークや蓮華台は葉研彫で刻まれている。蓮華台の上部には花心も描かれている。紀年銘の「永徳」は北朝の年号である。永徳二年は南朝の年号では弘和二年にあたる。銘文の刻まれる中央には、永徳二年五月二日に逆修供養(生前に自分の死後の冥福を祈る)をした人の法名が縦に書かれていたと思われる。

五
月
二
日

五月二日

永徳二年



No.6 永徳四年(1384)弥陀一尊種子板碑

主尊と銘文との間で真²⁷²二つに割れているのが残念である。主尊側をみると、花心も描かれている蓮華台の上に主尊キリークが刻まれ、しかも主尊の回りに月輪と呼ばれる円がとりまいている。銘文側は、「永徳二年五月廿七日」と刻まれた紀年銘が中央にあり、その両脇には
 光明遍照 十方世界 念仏無量 攝取不捨
 という偈文(經典にある詩文で、仏を讃えたり、仏法の真髓を述べたりしたもの)が刻まれている。大意は「南²⁷³弥陀如来の光明は遍く十方世界を照らし、念仏を唱える人々を攝取して捨てたまわず」この偈は観無量寿經からとった經文で弥陀板碑にしかみられない。この板碑の塔身部には回りに郭線がみられる。

五
月
廿
七
日

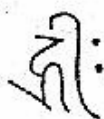
光明遍照
十方世界
念仏無量
攝取不捨
永徳二年五月廿七日

二つに割れている



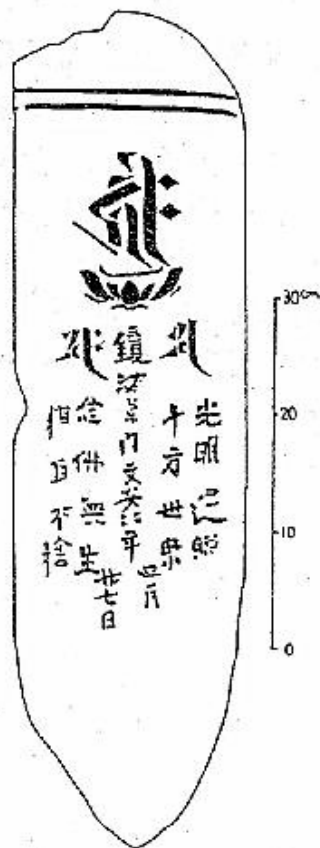
No.7 文安四年(1447)弥陀三尊種子板碑

花心も描かれている蓮華台の上に載る主尊 𠬞 (キリク・弥陀) の他、その左右下に脇侍 (主尊の左右に侍しているもの) である 𠬞 (サ・観音) と 𠬞 (サク・勢至) のあわせて三尊が刻まれている。銘文が書かれている中央には男性の法名とその下に年号・月日が、また左右には観無量寿經の偈文が刻まれている。この偈文については No.6 の解説文を参照のこと。法名の中の位号である「禪門」(男性)、「禪尼」(女性)は板碑によくみうけられる。鏡圓禪門が文安四年四月二十七日に逆修供養したものであろう。



𠬞 鏡圓禪門 文安四年 四月
念佛衆生 廿七日
撮取不捨

𠬞 光明遍照
十方世界

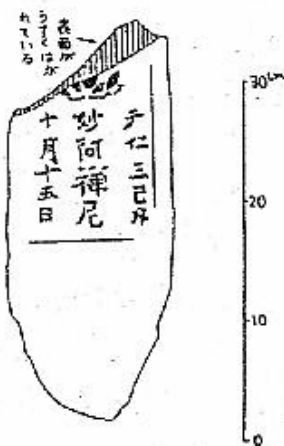


No.8 応仁三年(1469)一尊板碑

上部が欠落していて主尊は不明。描かれている蓮華台の位置により、一尊板碑であることがわかる。また、郭線がみられる。中央に刻まれている法名は、位号が禪尼であるから女性である。位号をみなくても法名の中に「妙」の字があれば女性の法名であるとわかる。また、法名の中に阿号(南無阿弥陀仏の「阿」をさす)がみられるので時宗板碑の可能性が充分ある。すると、時宗を信仰する女性信者が応仁三年己丑歳の十月十五日に逆修供養したものであろう。

妙阿禪尼
十月十五日

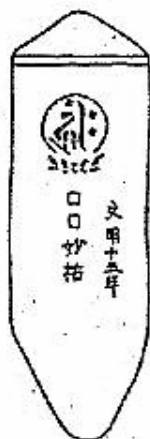
仁三己丑



No.9 文明十五年(1483)弥陀一尊種子板碑

蓮華台の上に主尊キリークが載っている。主尊の回りは月輪で囲まれている。紀年銘は「文明十五年癸(癸)卯(卯)」と刻まれている。向かって左端には月日が刻まれていたのであろう。中央には法名が刻まれている。法名の中に女性がよくつける「妙」の字があるのでこの法名は女性である。□
□妙祐という女性が文明十五年に逆修供養したものであろう。

※「越谷市金石資料集」の五十ページには右の図版が載っているが、紀年銘の中で「癸卯」の干支が記載されていない。



癸卯

□
□妙祐
文明十五年
癸卯



No.10 文明年間弥陀三尊種子板碑

蓮華台の上に載る主尊キリーク(癸: 弥陀)と、その脇侍サ(癸 観音)・サク(癸 勢至)がそれぞれ回りを月輪に囲まれている。右図は「越谷市金石資料集」の五十一ページに載っている図版である。今(昭和63年9月)の板碑はかなりいたんでおり、向かって石の側面から下にかけて表面がうすくはがれ、文字が消失している。しかし、この金石資料集の図版によって法名が道仲妙□と呼ばれる女性が文明年間の四月二日に逆修供養したのであろうことがわかる。



癸卯

癸 卯
道 仲 妙
四月二日
□
□



No.11 明応八年(1499)弥陀三尊種子板碑

主尊のキリークと脇侍のサ・サクの種子はそれぞれ月輪に囲まれ、蓮華台に載っている。三尊の上には天蓋(仏さまを覆う日傘のようなもの)があり、その天蓋の両端から飾りが垂れ下がっている。塔身部の左右の側には縦に光明真言と呼ばれる真言(密教で唱える呪文で梵字で表わす)が刻まれている。

ろんげんじつごてんごえん じつごてんごえん
 じつごてんごえん じつごてんごえん
 じつごてんごえん じつごてんごえん

大意は

靈験空しからざる遍照如来(大日如来)に帰命し奉る。大印ある者よ宝珠と蓮華と光明の徳を有する者よ、転迷開悟せしめ給え、ウン。

また、銘文をみると法名が鏡願禪門という男性が明応八年己未歳の十月十二日に逆修供養したのであろうとわかる。



ろんげんじつごてんごえん じつごてんごえん
 じつごてんごえん じつごてんごえん
 じつごてんごえん じつごてんごえん
 十月十二日
 鏡願禪門
 明應八年

「金石録料集」の
 55の図版によると
 銘文は
 明應八年
 己未年
 十月十二日
 逆修禪門
 となっている

No.12 永禄元年(1558)弥陀一尊種子板碑

主尊キリークを月輪で囲み、その下には蓮華台が刻まれている。この板碑は後期のものであるから、種子の彫りが初期のようにV字形に深く彫る葉研彫ではなく、浅い彫りとなっている。力弱い彫りではある。銘文を読むと、法名が妙心禅尼という女性が永禄元年八月十五日に逆修供養したことがわかる。

さて、この板碑の最大の特色は、彫られた主尊や蓮華台・銘文に埋め込まれた金が四百年以上も落ちずに残っていることである。このことは大変めずらしい。当時は彫ったあと、表面に何が刻まれているのか一目でわかるように金などを埋め込んだのであろうが、その名残りをこの板碑にみることが出来る。この板碑を発見したいきさつは大聖寺本堂裏手の一部を畑にしようと掘り起こした所、昭和62年2月頃に偶然に

みつかったものである。板碑の表面を伏せられた状態で掘り出されたためか金が今日まで落ちずに残ったのであろう。当時の名残をよく残している貴重な板碑といえる。



ろんげんじつごてんごえん
 逆修妙心禅尼
 永禄元年
 八月十五